

[成果情報名] カーネーションの有望系統「長崎1274」

[要約] 長崎県総合農林試験場で育成されたカーネーション有望系統「長崎1274」は、スプレータイプでピンク白に鮮赤の縁の鮮やかな花色であり、切り花長が長く、輪数が多く、花にボリュームがあり、花持ち日数が長い、すぐれた系統である。

[キーワード] カーネーション、有望系統

[担当] 総合農林試験場・作物園芸部・花き科

[連絡先] 電話（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4319

[区分] 花き

[分類] 普及

[背景・ねらい]

カーネーションは本県花き生産における主要品目の1つである。近年、中国からの輸入増加に伴う国際競争も激化し、日本の栽培農家は経営の危機に瀕している。

そこで、「長崎カーネーション」のブランド化を推進するため、花色・花・草姿がすぐれ、豊産性で茎が硬く、ボリュームのある長崎オリジナル品種の開発に向け、本場で交配された優良系統「長崎1274」を、主要品種「レスター」と比較し特性を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

(1) 「長崎1274」はスプレータイプで、ピンク白に鮮赤の縁の花色である（写真1）。

(2) 「レスター」より輪数が多く、年内採花本数も多く、切り花長も長い（表1）。

(3) 11月に茎が柔らかくなるが、12月には回復する（表1）。

(4) 切り花の前処理を行うと花持ち日数は20日以上となり、花持ち日数が長い（表2）。

(5) 「レスター」より花径が大きく花弁数も多いため、花にボリュームがあり、二次花柄が少なく、草姿がすぐれる。また、開花開始時に花弁が外側から順に開く咲き方をする。（表2、写真1）。

[成果の活用面・留意点]

1 . ベンチ栽培では秋に茎が柔らかくなるため、パイプハウス土耕栽培が適する。

2 . 平成19年度は生産者圃場で試作栽培を行い、平成20年度は大規模栽培を開始する予定である。

[具体的データ]

表 1 . 育成系統・品種の切り花品質の特性

系統名	採花開始日		切り花長	切り花重	輪数	下垂度*	採花本数	1株当たりの採花本数
			(cm)	(g)	(輪)		(本)	(本)
長崎1274	10/24	11月	77.2	28.8	6.1	2.2	0.8	
		12月	84.0	33.0	6.1	1.2	0.7	1.5
		1月	86.8	37.0	6.0	1.0	1.4	2.9
		2月	86.3	36.2	5.6	1.0	1.6	4.5
レスター	12/26	11月	-	-	-	-	-	
		12月	72.5	32.5	4.5	1.5	0.1	0.1
		1月	80.6	40.2	4.8	1.0	0.7	0.8
		2月	83.9	47.9	6.1	1.0	1.9	2.7

下垂度：先端から 50cm の位置で水平に保持し、下垂した角度。0° ~ 10° = 1 とし、90° までを 9 段階に分類した数値
 耕種概要：硬質フィルムハウス 隔離ベンチ栽培で、2007 年 6 月 24 日に定植。栽植様式は 70cm ベンチ株間 10cm 2 条植え 14000 本/10a、一回目の摘心 7 月 20 日、2 回目の摘心 9 月 25 日、3 回目の摘心 10 月 18 日。切り花品質調査は 2007 年 11 月 1 日 ~ 1 月 31 日まで行った。点滴灌水装置で常時施肥を行い、冬季は最低夜温 12℃ で管理した。

表 2 . 育成系統・品種の花持ち日数と花の形質

系統名	花持ち日数(日)		花径	花梗	花弁数	二次花柄数
	無処理	前処理	(cm)	(cm)	(枚)	
長崎1274	14.0	23.3	4.9	12.7	29.4	4.0
レスター	13.8	22.3	3.9	13.5	23.0	8.8

花持ち調査は 2007 年 2 月 21 日採花分から開始した。無処理区は水道水で、前処理区はクリザール K-20 c 1000 倍液で、4℃ の冷蔵庫で 10 時間水揚げ後、外花弁が水平状態の開花ステージで採花した花を用い 12 時間電照 1000lux 平均湿度 63% 平均温度 19.4℃ の条件下で調査した。花持ちは下表評点 3 以上の日数の平均値を花持ち日数とした。花の形質調査は、2008 年 1 月 17 日に行った。

鮮度の評点

評点 鮮度評価
5 正常な花
4 花弁先端部にわずかに変色・インローリング(花弁の内側への巻き込み)の見られる花
3 インローリングが始まっているが、観賞に耐える花
2 萎ちょう・インローリングの明らかな花
1 萎ちょうの進んだ花
0 枯死



写真 1 . 「長崎 1274」の花形・花色

[その他]

研究課題名：カーネーションの新品種育成

予算区分：県単

研究期間：2004 年 ~ 2008 年

研究担当者：櫛山妙子、諸岡淳司